

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて

——道元禪師の伝記史料を整理する——（中間報告）

吉 田 道 興

はじめに

拙稿は、本学の前禅研究所所長岡島秀隆先生のご厚意で私どもの「最終講義」を研究会の形で『道元禪師伝記史料集成』（二〇一四年一月、あるむ）を素材に急遽まとめたもので疎漏ながら、研究成果の一端としてとりあえず報告させて頂いたものです。まずは、茲にご配慮下さいました研究所各位と出版社あるむの皆様深くお礼申し上げます。筆者としましては、今後、集成史料を細大漏らさず網羅し充実した内容に展開する所存です。

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

『道元禪師』伝記研究の動機

筆者が駒澤大学の大学院に入学した年、なぜか『解深密経』分別瑜伽品の文節「彼の影像是唯だ是れ識に由る」に魅かれ、『瑜伽師地論』本地分（瑜伽止観・禅観）を中心とする「瑜伽行唯識」（唯識）を小川弘貫先生に師事し研究することに決めていた。その時期に道元禪師のご母堂（伊子）に関し、木曾義仲の愛妾であったという説、さらに道元禪師の大悟の機縁となった「身心脱落」の語句に対し、正師如浄禪師の「心塵脱落」（『語録』）の語を聞き違ひ・誤解から生じたのではないかという一種の思いつきによる高崎直道氏の思考（『古仏のまねび〈道元〉（仏教の思想Ⅱ）』一九六九（昭和四十四）年、角川書店）に接した。

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

戸惑いを覚えた筆者は、いずれ、このような課題を追求したいと心に記していた。その後、博士課程を満期終了した年に恩師河村孝道博士の編著『諸本対校 永平開山道元禪師行状建撕記』（一九七九（昭和五〇）年、大修館書店）を購入し、「古本建撕記」を起点にして他の史料を蒐集し、発展的かつ総合的に研究する意欲を秘かに抱いた。

本論

一、従来における道元禪師の伝記研究成果と

筆者のスタンス

「道元禪師伝記」研究の先達として、多数の方々がおられる。中世の永平寺十四世建撕撰『永平開山道元禪師行状記』、近世の面山瑞方撰『永平開山実録』、『訂補建撕記』、『祖師年譜偈』、『永平祖師贊』（『訂補建撕記図会』は没後六十年、本文に絵図を付したものの）、その他、永平寺住持では、大了愚門撰『永平仏法道元禪師紀年録』・版焼晃全撰『僧譜冠字韻類』・玄透即中撰『永平高祖行実記年略』等をはじめ、有名な編著者が複数想起でき、これらの史料を当該書の「集成」に入れた。

また研究書として現代においては、大久保道舟著『道元禪師伝の研究』、鏡島元隆編『道元禪師の引用經典語句の研究』他、中世古祥道著『道元禪師伝研究』（改編、正・続）、河村孝道編著『諸本対校 永平開山道元禪師行状建撕記』（前掲書）・『永平正法眼蔵蒐書大成』諸巻、竹内道雄著『人物叢書 道元』、伊藤秀憲著『道元禪研究』等が挙げられる。これら先人の成果を踏まえ、斯道の研究を促進すべく、できるだけ多くの史料を参考にして検討する作業を二十年ほど前から始め、やっと今日に至り、「解説」文中にそれらを多少反映し、まだまだ不完全ながら一応『道元禪師伝記史料集成』にまとめることができた。今後、訂正稿を予定している。当該書における筆者のスタンスは、曹洞宗の教団史における「高祖」と称される道元禪師の「祖師像」が、どのようにして成立し形成されてきたのかという点に興味と関心があった。言い換えれば、従来の「史実」を中心にした研究は勿論大事であるが、限界があるのではなかるうか。すなわち実際の現存する伝記史料の多くは、それをはるかに超えた理想的な祖師として「信仰」面の叙述が多く占めていると思われるからである。従って明

らかに史実に反すると思われる史料、帰朝前に天童山で「上堂」し、僧衆と「五十問答」を交わした文献四本や戯曲伝奇類に属する『道元禪師行状伝聞記』（異本四種）も敢えて集成に入れていれることをお断りしておきたい。

信仰面の叙述が当然ながら偉人伝・聖人伝にはつきものであると言えよう。第一に平安時代以降の日本仏教の特色は、大恩教主釈迦牟尼仏ないし阿弥陀仏・大日如来等が示した經典に基づく宗派が成立し、それら宗派の教祖（開祖・宗祖）の教えが僧俗による崇拜の中心となつている。その形態から「祖師仏教・祖師信仰」と指摘され、同時に各宗派による教祖の神聖化、偉人化・聖人化への傾向が強いのである。曹洞宗も建前は「一仏両祖」であるが、実際は高祖道元禪師と太祖磐山禪師が中心であり、その点はご多分に漏れない。

第二に少ない史実をいかに展開するか。そこに伝記作者の苦勞と力量が問われる。筆者が私的に仮説として設定した道元禪師の初期（元亨三年〜天正十七年）に属する伝記として、その生涯をまとめたものは、撰者不詳ながら、一般に『三祖行業記』『三大尊行状記』と称されるもので、

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

高祖の没後約七十年を経て応永年間（一三九四〜一四二八）頃までに成立している。この「行業記・行状記」の項目は、ざつと五十余である。その頃、断片的な項目の書目として磐山禪師の講義録である『伝光録』や日記・記録風な記録『洞谷記（伝灯院五老悟則并行業略記）』、それに天性融石撰の略伝的項目の『仏祖正伝記』などがある。これら三書の項目は、二十から二十五程度であり極めて少ない。この他、異色な史料として臨濟宗東福寺藏主大極聖鄰撰『碧山日録』（『史籍集覽』所収）がある。これは曹洞宗の僧侶（不詳）から得た情報をまとめたもので、以前にはない項目の「新到列位」「一夜碧岩」「彈虎拄杖」など若干増えている。次に中期（永暦四年〜元禄七年）に属する代表的な史料は、建撰撰『永平開山道元禪師行状記』であるが原本はない。その写本である「古本建撰記」には数本伝来している。その中で「瑞長本」の項目は、百三十余と大幅に増えている。さらに後期（元禄十五年〜嘉永五年）の代表的史料の面山瑞方撰『訂補建撰記（永平開山御行状建撰記）』においては、百六十ほどになっていることが知られる。いずれにしる当初の限定的項目や内容から、次第に

追加増幅し、時に修正もなされ次第に充実した内容になっていくのが、これら伝記成立の通例であると言えよう。

二、諸種の瑞相・靈瑞——史実と粉飾の狭間

一般に伝記の内容は、次のようにいくつかの類型が想定できる。まず（1）「史実（確実な歴史資料）」、（2）「資料はないが史実に近いと見做されるもの」、（3）「悪意のない文学的粉飾・潤色」、（4）「資料はあるが史実として疑わしいもの」、（5）「信仰より生じた逸話」など。この（5）を道元禪師の伝記に照らして言えば、①崇敬心から自然発生した宗教的真実として神秘的祥瑞・靈瑞・瑞相、靈驗、高揚化・伝説化等を含み、自然界の龍天（天龍）、龍、虎や白光、降雨、五色彩雲、芳香等の化現と、②超人（異人・神人）的存在である観音菩薩、招宝七郎大権修理菩薩、白山明神（権現）・稲荷神、韋將軍（韋駄天）が登場し加担する。中でも戯曲伝奇風な『道元禪師行状伝聞記』には、三輪明神、石清水主神、太白星、掌簿（護法神）、羅漢等が頻繁に化現し、前と同様、危難に遭うたびに現れ加担している。

さらに具体的な道元禪師の誕生に即する瑞相として「胎処十有三月」はさておき、「七処平満、骨相奇秀」「懷妊（誕生）時、空中有声」は、仏三十二相や釈尊（仏陀）伝の掲載する『大方便仏報恩経』、『仏所行讚』の偈文、『本行集経』姨母養育品・私陀問品等、また聖徳太子伝（『上宮皇太子菩薩伝』等）に見られ、「眼有重瞳」の語は『史記』五帝紀、『論衡』骨相。『五雜俎』人部一などにその典拠がある。これらの聖人伝は、伝教大師最澄伝（『叡山大師略伝』『伝教大師行業記』等）や弘法大師空海伝（『御遺告』『空海僧都伝』『大僧都空海伝』等）にも同様な傾向がある（拙稿「聖徳太子伝」と「道元禪師伝」の靈瑞・神異譚考）廣瀬良弘編『禪と地域社会』吉川弘文館、二〇〇九年三月、「道元伝」の靈瑞・神異譚と「最澄伝」および「空海伝」との比較考『印仏研』五七卷二号、二〇〇九年三月参照）。

その他に道元禪師の伝記に所載する前掲の（5）に属する奇瑞・靈瑞関係の内容は、釈尊（仏陀）伝の「八相成道」時における諸種の靈瑞や唐代光宅寺法雲の『法華経』講讀時に天華が雪のように降り堂内に参入した逸話や『法

『華玄義』卷七下に「瑞（七相）」（正蔵三十三）、『法華文句』卷二下に「六瑞」等はその例があり、伝記作者は恐らくそれらを斟酌しながら伝記を編集したことが推定できる。高祖伝の次の瑞相は、それらに該当するであろう。

寛元二年七月の①「大仏寺開堂法要」の瑞相「天龍降雨（龍天興雲）、山神興雲（山神現形）」は天雨華瑞、寛元三年四月の②「大仏寺初夏」の瑞相「天花乱墜、茶筌（盞）散入」は天華如雪瑞、寛元五年正月の③「布薩説戒」の瑞相「五色彩雲、方丈障子、半時斗在」は説法瑞・天華如雪瑞、宝治二年の④「僧堂芳香」の瑞相「四月より十一月まで異香殊勝」は梅檀風瑞、宝治三年正月の⑤「羅漢法要供会」の瑞相「生羅漢放光」は説法瑞・放光瑞、建長三年の⑥「不思議鐘声」瑞相「七、八年間、二百声続く」は「鐘声」ではあるが、天鼓自然瑞に匹敵するであろう。この中、③④⑥は懷奘筆「永平寺三箇靈瑞記」（現、東京国立博物館所蔵）として伝えられている。また⑤は陸州（茨木）若柴金龍寺に伝道元禪師筆「十六羅漢現瑞記」とされている。さらに建長五年八月の入寂相「坐化、留三日顔貌如生、室有異香。舍利多数」中の「室有異香」は梅檀風、

「舍利多数」は正師如淨禪師の「茶毘後、五色舍利不知数、限歯牙皆剛不壞」（古本建擲記）に由来する可能性がある。

江戸期の淨瑠璃作家近松門左衛門の説とされる「虚実皮膜」の芸術論は、近松に私淑した儒者の穂積以貫撰『難波土産』に叙述するもので直説ではないかもしれないが、これは虚構と真実の微妙な間（皮膜）にこそ「芸術の真実味・面白み」が現われるという意味であろう。宗教上の聖人を表現する場合にも、崇敬や慕古の念から自然とそのような表現されるものと思われる。

三、道元禪師の伝記における主要な事項例（抜粋）

〔一〕「誕生時の年月日」。当初の史料にはその記述はない。次第に「正治二年（某月日）」（古本建擲記）「道元和尚行録」から「正月二日」（曹洞列祖行業記）「僧譜冠字韻類」と定着化するが、その典拠は示されず、その意味で不明のままである。

〔二〕「両親の家系と名前」。当初は「村上天皇九代の苗裔、後中書王八世の遺胤」とだけで実名の記述がなく不明

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

であった。その後、初めに垂相通忠説（『列祖行業記』）、次に通親説（『冠字韻類』『洞上諸祖伝』）が有力となり、最近の説として「為育父源垂相忌上堂」（『永平広録』）の語句により、山端昭道先生の研究などから、父は久我通具が有力である。しかし母に関しては、中世古祥道氏の研究に依り諸説（法性寺執行能円女（信子）・藤原基房女（伊子）等）が想定されたものの依然として手がかりがなく、現在は不明のままである。

〔3〕「外舅の良顕と良観の両説」。古くから「良顕」説（『行業記・行状記』）があり、その後「良観」説（『冠字韻類』『洞上諸祖伝』）となり、面山瑞方は、当初「良顕」説（『永平実録』）をとっていたが、後日、猶子の要請をしたとされる藤原基房とのつながりがあり、その接点から息子の良観に変更（訂補建擲記）しているが、これはむしろ彼の拙速といえよう。原点の「良顕」説に戻り検討するしかなかろう。

〔4〕「栄西との相見問題」。『正法眼蔵隨聞記』の文中には、明全和尚より、その師栄西の人柄に関し情報を得ていたと思われ、「古僧正」として戒律為先から生じる清廉性

に敬意を抱き、複数の逸話を語っている。また『宝慶記』には「千光禪師の室に入り」の語があり、「相見」を示すような文献、さらに『永平広録』にその忌辰に二度の「上堂語」も行われているが、歴史的史料に乏しい。栄西の示寂年建保三年（一一一五）四月二十日（一説、五月二十七日）当時、道元禪師は十六歳であるが、京と鎌倉を頻繁に往来していた栄西と偶然「面会」があっても所謂「相見」の可能性は低いようにおもわれる。

〔5〕疑団「本来本法性、天然自性身」問題。この問題は、学術的典拠として①『宝慶記』と②『大乘止観法門』の叙述が想定できるが、山内舜雄先生が指摘するように當時すでに天台教義の上では初等程度の問題で決着（落居）していたのであり、それを比叡山や三井寺の僧衆が教示できないわけではない。そうした面から伝記作者の虚構とみなされる。末尾に付す筆者の論文（3）「本来本法性」疑団の考察——その虚構性に関して——を参照願いたい。

〔6〕「建仁寺明全からの「伝法」と「伝戒」」。伝法資料として伝わる承久三年九月十二日の「明全伝授師資相承偈（明全師資承襲偈）」（永平寺所蔵）には、面山が指摘する

ようにこれは天台山万年寺の虚庵懐敏と明庵栄西との機縁にまつわる(『訂補建撕記』)もの、また明全が栄西の偈を道元禅師に与えたものと伝えられ、筆跡も明全のものかはつきり特定できない点などから問題を含む。伝戒は「授理観戒脈」(原本逸亡、写本は永平寺に所蔵)の間接資料があり、ほぼ妥当とされている。

〔7〕「一葉観音化現・観音信仰」。この逸話は、末尾に付す筆者の論文(5)「高祖道元禅師再考——粉飾的記述に関して」と(10)「高祖道元禅師の伝記研究——粉飾的記述に関して」を参照願いたい。当初、「古本建撕記」では、叙述が後半箇所「帰朝後の述懐」にあり入宋前の出来事としているが、後に『曹洞列祖行業記』から「補陀大士(二葉観音)」は帰朝中に化現する内容に移行している。この逸話は、空海の入唐時「涌夕観音」が想起できる。

〔8〕「育王典座と相見」。道元禅師の「修証観」に大きく影響を与えた阿育王山典座との相見を叙述する典拠が『典座教訓』である。これを面山が『永平実録』『訂補建撕記』に使用しているわけである。近世以降、これを含め『正法眼蔵』『永平広録』等の把握が可能となり、伝記作者

『道元禅師伝記史料集成』の刊行を終えて(吉田)

がそれらを使用することが可能となった背景があったと言えよう。

〔9〕「新到列位」問題。日中間の「授戒制度」(小乗比丘戒と大乘菩薩戒)の相違があり、中国では終始一貫、これを厳然として維持していた。新到の道元禅師がこれに異議を唱え改革し、寧宗皇帝がこれを容認することは決してなかった。この問題は末尾に付す論文(6)「高祖道元禅師伝考——新到列位の問題」と(7)「高祖道元禅師伝考——戒牒に関する問題について」、さらに(32)「再考」新到列位問題・是認論を否定する」を参照願いたい。

〔10〕「彈虎拄杖逸話」。この逸話の場所が当初の天台山から径山、そして江西と変転している。虎の出現箇所を試行錯誤している過程が見られる。ちなみ禅師が江西に行脚した事実はない。しかも義尹が入宋した際、村人から聞いた逸話を示す「彈虎図」を伝来したという。この逸話は、末尾に付す筆者の論文(27)「道元禅師伝の靈瑞逸話考——羅漢信仰の進展と「十六羅漢図」の流布」を参照願いたい。

〔11〕「老璫が如浄を指示する」。これには、①径山にて

嘉定十七年五、六月（中世古祥道説）、②天童山内にて同年七月（伊藤秀憲説）、③同上十一月（鏡島元隆説）の三説がある。初出史料『洞谷記』には、径山羅漢堂において「老人」からのものであるが、「古本建擲記」以降に名前が「老璣」となり、『建擲記拔萃』や『道元禪師行状図会』では老璣を「羅漢の応現」とみなすように進化していく。

〔12〕「如浄の天童山入寺時期」。これには、①嘉定十七年（月日なし）（『列祖行業記』『道元禪師和尚行録』等、伊藤慶道説）、②同年五月十日（『眼蔵陸座』『道元禪師行状之記』）、③同年七、八月（秋）（鏡島・伊藤説）。④宝慶元年四月頃（中世古説）があり、現在では③が有力になっている。

〔13〕「道元の如浄との相見時期」。これには、前掲如浄の入寺時期と関連し①嘉定十七年説（『延宝本建擲記』、他の「古本建擲記」は年月を記さず）、②同年五月一日（伊藤秀憲説・角田泰隆説）、③宝慶元年五月一日（『永平実録』『訂補本』『訂補図会』、大久保道舟説・河村孝道説）、④宝慶元年七月二日以降（竹内道雄説）がある。

〔14〕道元の「身心脱落時期」。これも前掲相見時期と関

連し①嘉定十七年説（『延宝本建擲記』）、②宝慶元年五月一日（『眼蔵』『面授』、杉尾玄有説）、③同年夏安居中（『眼蔵』『仏祖』、『訂補本』、『訂補図会』、河村孝道説・竹内道雄説）、④同年九月十八日（この「伝戒と同じ時期。中世古説」、⑤宝慶二年夏安居中（柴田賢道説）等がある。角田氏は、この期間を上記の②と「五月一日から七月二日の間」、「七月二日以降から九月十八日の間」、「九月十八日以降のほど遠くない日」などを想定している。この課題「身心脱落」の語句に関しては、末尾に付す筆者の論文（一）「心塵脱落と身心脱落について」を参照願いたい。

〔15〕道元の「伝戒と嗣法時期」。これには、①宝慶元年九月十八日（『仏祖正伝菩薩戒作法』）、②宝慶三年、帰朝直前か（今枝愛真説）に絞られるであろう。上記の〔12〕〜〔15〕の問題に関しては、末尾に付す筆者の論文（33）「如浄会下における道元禪師——相見・入室・身心脱落・嗣法・伝戒考」を参照願いたい。

〔16〕「碧岩集」（二夜碧岩）書写」。通称「一夜碧岩（仏果碧巖破関撃節）」（現、大乘寺所蔵）に関し、当初は永平寺にあったが、暦応三年三月十一日に火災で「開山御

「影」が焼失、大乘寺奉安の「永祖像」を大乘寺から納入され、代わって当該書を大乘寺へ譲られたと伝える。その「二夜碧岩」について鏡島元隆・竹内道雄両氏の論争がある。逸話とは別に本書は、歴史的に日本達磨宗の伝来したもの（鏡島『道元禅師と引用経典・語録の研究』中に西有穆山説を紹介）と思われる。この逸話に関しては、前掲〔7〕の筆者の論文（5）と（10）（15）に若干論述した。

〔17〕「木下隆英（法諱（道正））の存在と木下家伝来『解毒万病丸』の事」。版橈晃全撰『僧譜冠字韻類』には、明全の配下、禅師と共に入宋し、諸国行脚中に禅師が急病の際、老嫗（稻荷神）が現われ丸薬を服用し、その製薬法を道正が教わり、帰朝前夜、如浄の室に入った、という。

その後、木下家十九世徳幽卜順は、『木下家』元祖（隆英）伝」を著わし、「神仙解毒万病丸（円）」を売り出す顛末を述べる。まことに荒唐無稽な物語を創作しているわけである。この逸話の問題は、末尾に付す論文（31）「高祖伝の形成と道正庵——策謀家道正庵十九世徳幽卜順」を参照したい。

〔18〕「如浄の示寂年月日」。これに関しては、『如浄語

『道元禅師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

録』の「上堂語」等を通し、種々論議されてきたが、結局「宝慶三年七月十七日」と「古本建撕記」に明示されていることで、決着している。

〔19〕「帰朝年次」。これに関し、道元禅師ご自身が①（日本年号）嘉祿中（『普勸坐禅儀』）十二月九日以前と②（中国年号）紹定のはじめ（『辨道話』）とあり、日本の年号では安貞元年（一二二七）十二月十日（冬）、中国の年号では紹定元年（一二二八）一月頃となるであろう。

〔20〕「帰朝の着岸地」。古くは、①肥後（河尻・川尻）説（『古本建撕記』等）であり、後に②博多（太宰府）説（『道元和尚行録』等）になっている。「一葉観音」関連の逸話や義尹ゆかりの大慈寺があるのは肥後であり、伝承としてはこちらが有力であろう。

〔21〕「将来・伝授物」中、「釈迦文仏茵褥（しとね）」と「芙蓉」楷祖法衣」。この中、「芙蓉納法衣」の伝来は、初出「行業記・行状記」に載せるが、『室中間書』では否定的（中世古説）である。「古本建撕記」では「延宝本」（このほか宝鏡三昧・五位顯訣・〈如浄〉自贊頂相も含む）だけであり他の異本にはない。「釈迦文仏茵褥」の初出は、

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

『列祖行業記』に見え、このほか道信香合・慧能念珠・洞山頂相等も含み、「永平庫蔵」にあると記す。それらは、文政元年（二八一八）の「校割帳」（監院寮）に「釈迦文仏誕生之茵褥」「六祖大師念珠」「芙蓉道階（楷）和尚袈裟環排」が記載され、大正年間の「宝蔵内宝物棚記號録」（監院保管分）には、「釈尊誕生御褥」「高祖御袈裟及直綴（高祖曹溪大師數珠傳來）」「惠能大師念珠 一聯」と記載され、その実物が永平寺に現存している。にわか信じられないものの、逸話を裏付けるものが作成されて存在することは、信仰史の上で意義があると言えよう。

〔22〕「天童和尚忌上堂」の時期。若い時期の面山が『永平実録』では「嘉禎二年」と設定しているが、これは誤りであり、『永平広録』巻二では「寛元三年七月十七日」が正しい。

〔23〕「如浄語録」到来の時期。面山は、当初『永平実録』では、「仁治二年春」に設定していたが、後日『訂補建撕記』では『永平広録』巻一に基づき「古本建撕記」に習い「仁治三年八月五日」に訂正していることが判明する。

〔24〕「後嵯峨院の紫衣・禪師号下賜」。伝記諸本には多数の時期を設定していること自体が不審である。中世古氏は、『訂補』の注「コノ四句偈ハ諸傳違却アリ、今ハ永平（十九世）祚球和尚ノ朝倉義景に挙セラレシ説ヲ以テ写スナリ」を引き、十六世紀前半頃にその伝承があったものと推定している。いわば伝記作者は、天皇の御威光を借り、道元禪師を挙揚しているものと思われる。

〔25〕「鎌倉下向関連逸話」。北条時頼の伽藍建立と住持要請、六条堡寄進、玄明擯罰。檀那俗弟子である波多野義重の要請で鎌倉へ下向し、名超白衣舎（邸宅）で説法したことは、『永平広録』巻三の「帰山上堂」で明らかである。その説法は「鎌倉名超白衣舎示誡」（大野市宝慶寺蔵）として伝わる。時頼等への菩薩戒授与は可能性はあるが、確実ではない。また滞在中、時頼の所望で「道詠《教政子》よりの所望された」こと以外、上記の逸話を証する史実史料はない。

〔26〕「蘭溪道隆との交信」。「古本建撕記」に二人の交信を示す書状が掲載するものの末尾に「此ノ二通之書札ヲ見

合スルニ難心得多シ」（瑞長本）云々とするなど、史的資料が欠如する。この真偽問題に関し、賛否両論がある。

〔27〕「血脈度靈」逸話とその背景、授戒会の宣伝。①A「義重愛妾」、②B「永平愛妾」。この課題は、末尾に付す論文（18）「道元禪師外伝「血脈度靈」逸話考——血脈授与による救済と性差別」を参照願いたい。

〔28〕「尽未来際不離」語。鎌倉より帰山直後でもない時期に述懐するのは、やや不自然。この誓約文に関し「瑞長本建擲記」に記すように『永平広録』等の記録には見えない。

〔29〕「後深草院、官医の召請」。道元禪師の最晩年、上洛し療養中に後深草院が官医を召請し診療せしめた（『延宝本建擲記』）逸話がある。その後、『永平実録』等に引き継がれ定着化される。村上天皇の苗裔・後胤である久我家の出身である道元禪師に対し、可能性としてはあり得ようが、〔24〕と同様に史的資料が欠如している。

〔30〕「僧臘」の出家年齢問題。道元禪師の「俗寿」五十四は、諸伝記に共通し問題はない。ところが「僧臘」に関し、①三十七、②四十一、③四十四の三説がある。これを出家年齢で示すと順に、①十七歳、②十三歳、③十歳とな

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

る。この中、多くは十三歳説である。『仏祖正伝記』の僧臘は「三十有七」とあるのに、十七歳ではなく本文での出家納戒は「年十四」となっていて論理的に矛盾している。「行業記・行状記」もこれと同様であり、『碧山日録』も「坐夏三十七」としながら、明季（十四歳）に公円について出家したことを述べる。『永平開山禪師之行状伝聞記』（異本四本とも）は、「僧臘四十四」とあり、その十歳の時に「出家の志念」を抱いたと記しながら、十四歳の年に比叡山横川首楞嚴院で剃髪染衣の体をなした（出家）とあり、論理の破綻をきたした論であり、この説は無視してもよからう。

暫定的まとめ

以上、筆者の関心が強く注目している項目に関し、短期間で大雑把な整理を試みた。道元禪師の伝記には、上記の項目以外に、まだ多くの未解明な面を有するし、その点でこの試論的整理は十全なものではない。一応、全体的な概要を探る上で現在の時点で、かつ狭い視点で眺めたものに過ぎないことをあえてお断りしておきたい。しかし、その

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

限定的な範囲で眺望した上からでも、多くの伝記作者（および写本の筆者）は道元禪師に対し、深い信仰と敬慕の心から長年を掛け「高祖像」を形成してきたわけである。不遜ながら未熟な筆者は、その御苦勞に甚深の敬意を表したい。その上から吾人は、後述する「（仮称）道元禪師の伝記史料一覽表」から曹洞宗の教団史における「祖師像」の変遷過程を多少、垣間見ることができないのではないかと、秘かに願っている。今後は、少なくともも集成した史料（六十三本）を細大漏らさずに各項目へ振り分け、その上で比較対象しながら論及する予定である。

以下、各資料の解説をする。

はじめに筆者の刊行した『道元禪師伝記史料集成』（六十三本）の紹介として、十項目に編集してならべた。

一、（一）「三大尊行状記」「三祖行業記」系、（二）「洞谷記」系

二、（一）「伝光録」（瑩山撰）類、（二）道元和尚行録類

三、建撕記系

四、「五十問答」所載高祖伝系

五、（一）諸僧伝記集成（その一）、（二）諸僧伝記集成（その二）

六、面山撰高祖伝類

七、（一）高祖伝集成（その一）、（二）高祖伝集成（その二）

八、（一）高祖略伝集成（その一）、（二）高祖略伝集成（その二）

九、高祖絵伝類

十、（一）戯曲・伝奇類、（二）年譜・和讃類。

次に上記の史料と「古本建撕記」（明州本・延宝本・元文本）を加え、便宜的に三期に分けて成立順に並べた。また上記の「一覽表」内に記入する上で史料名を略称し、その文字をゴチック体で記入した。「一覽表」は、右側に項目名を記し、その下段に三区分して、上記の略称で挿入している。史料名の挿入は、筆者が個人的に重要と思われるものを抜粋し、すべてを網羅的に入れていない。その点是不備でありお詫びする。

「一覽表」の後には、参考までに筆者の道元禪師伝記研究関係の論文を付けてある。それらは前半の箇所です時指

摘している。

以上

二、(1) 伝光録類 (写本) 三本

「伝光録」永享く長祿年間(一四二九く一四六〇)

写、「瑩山和尚伝光録」明和四年(一七六九)写、仏洲

編「瑩山伝光録」安政六年(一八五九)刊。

(2) 永平開山道元和尚行録類 (写本) 四本

「初祖道元禪師和尚行録」(内閣文庫本)、「永平開山道

元和尚行録」延宝元年(一六七三)刊、行録(御開山行

録)(祖山本)(一七一六く一七二九)、「行録」明和八年

(一七七二)恒山一川写。

三、建擲記系 (写本) 四本(参考・河村編、明州本(一

五三八)、延宝本(二六八〇)、門子本(一六九四))

「元古仏縁記」天正十七年(一五九〇)写、「永平初祖

行状記」享保十五年(一七三一)写、「永平祖師行状

記」安永七年(一七七八)写、「建擲記并御詠歌」享和

二年(一八〇二)写。

四、「五十問答」関係 四本(内、写本三本)

「正法眼蔵第九十四陞座」元祿六年(一六九三)写、

大了撰「永平仏法道元禪師紀年録」延宝六年(一六七

八)刊、「道元禪師行状記」元祿十五年(一七〇二)写、

吉田編著『道元禪師伝記史料集成』(二〇一四年一月、
あるむ刊)所収史料 六十三本

一、(1) 三大尊行状記・三祖行業記系 四本

「元祖孤雲徹通三大尊行状記」(大乘本) 応永年間(一

三九四く一四二八)、「永平寺三祖行業記」(統群本) 応

永年間(一三九四く一四二八)、「大扶桑国越州吉祥山永

平禪寺三祖行業記」(貴外本) 享保年間(一七一六く一

七三六)写、「大日本国越州吉祥山永平禪寺三祖行業

記」(道忠本) 享保年間(一七一六く一七三六)写。

(2) 洞谷記他 六本

瑩山撰「洞谷記」(五老悟則并行業略記) (大乘本) 元

享三年(一三三三)・永享三年(一四三一) 写・享保三

年(一七二八) 再写、天性撰「仏祖正伝記」(永福本)

応永六年(一三九九) 序、大極撰「碧山日録」長祿四年

(一四六〇) (上記の貴外本・道忠本の二本) (享保年間

一七一六く一七三六)、大円撰「永平伝法記」元祿四年

(一六九二) 写。

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて(吉田)

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて(吉田)

「永平開山道元和尚行状録」文政元年(一八一八)写。

五、(一) 諸僧伝記集成(その一) 五本

懶禪撰「日域曹洞列祖行業記」寛文十二年(一六七

三) 撰・寛文十三年刊、高泉撰「扶桑禪林僧宝伝」延宝

三年(一六七五) 撰・貞享五年(一六八八) 刊、高泉撰

「日東洞宗初祖元和尚道行碑銘」延宝七年(一六七九)

撰、卍元撰「延宝伝灯録」延宝六年(一六七八) 撰・宝

永三年(一七〇八) 刊、版橈撰「僧譜冠字韻類」貞享二

年(一六八五) 撰・元禄元年(一六八八) 刊。

(2) 諸僧伝記集成(その二) 四本

永覚撰「継灯録」永曆四年(一六四八) 輯・順治八年

(一七五一) 刊、湛元撰「日域洞上諸祖伝」元禄六年

(一六九三) 撰・元禄七年刊、卍元撰「本朝高僧伝」元

禄十五年(一七〇二) 撰・宝永四年(一七〇七) 刊、嶺

南撰「日本洞上聯灯録」享保十二年(一七二七) 輯・寛

保二年(一七一七) 刊。

六、面山撰述〔關係〕高祖伝類 四本

「永平開山和尚実録」宝永七年(一七一〇) 撰・正徳

元年(一七一一) 刊、撰者不詳「永平実録隨聞記」文政

六年(一七二三) 写、「訂補建撕記」宝曆三年(一七五

三) 撰・宝曆四年(一七五四) 刊、「訂補建撕記図会」

文化三年(一八〇六) 撰・文化十四年(一八一七) 刊。

七、(1) 高祖略伝集成(その二) 五本

安州撰「永平語録標指鈔(永平元禪師行状記)」貞享

元年(一六八四) 撰・貞享二年刊、古溪撰「日本洞宗始

祖道元禪師伝」享保十五年(一七三〇) 撰・享保十六年

刊、万仞撰「永平破五位弁(永平高祖略伝I)」宝曆十

三年(一七六三) 撰、大冥撰「本朝伝来宗門略列祖伝」

文化五年(一八〇八) 撰・文化六年刊、知見撰「永平開

山道元禪師略行状記」文政三年(一八二〇) 刊。

(2) 高祖略伝集成(その二) 三本

月坡撰「月坡禪師全録(永平元禪師伝)」天和二年

(一六八二) 刊、節晃撰「正法眼蔵重写記(高祖略伝

II)」元禄五年(一六九二) 写、父幼撰「正法眼蔵那一

宝(高祖略伝III)」寛政三年(一七九二) 刊。

八、高祖略伝集成(その三) 四本

法転撰「建撕記抜粹(道元禪師行状録)」享和二年

(一八〇二) 刊、瑞岡撰「永平道元禪師行状図会」文化

五年（一八〇八）撰・文化六年刊、黄泉撰「永平道元禪師行状之図」文化十三年（一八一四）刊、黄泉撰「永平高祖行状記」（前掲書の異本）昭和十九年（一九四四）写。

九、高祖絵伝類 四本（絵図は除き、解説文のみ）

撰者不詳「永平高祖一代記画説」天保四年（一八三三）記、撰者不詳「永平高祖行跡図略伝」嘉永五年（一八五二）頃、仏鑑撰「洞上高祖承陽大師行実図絵」明治二十九年（一八九六）刊、鷲尾透天撰「承陽大師御行状図解説」同上。

十、（一）戯曲伝記類（写本）四本

撰者不詳「永平開山禪師之行状伝聞記」宝永六年（一七〇九）・宝曆九年（一七五九）普問写、「勅賜仏法禪師永平開山道元和尚行状伝聞記」享和二年（一八〇二）写、「永平開山元禪師行状伝聞記」文化二年（一八〇五）写、「永平開山道元禪師行状伝聞記」書写年不詳。

（二）年譜和讃類 五本

面山撰「永平祖師年譜傷」享保二年（一七一七）撰・延享元年（一七四四）刊、面山撰「永平祖師贊」享保十

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

七年（一七三二）刊、万仞撰「高祖禪師和讃」寛保二年（一七四二）撰・明和六年（一七六九）刊、玄透撰「永平高祖行実紀年略」天明八年（一七八八）刊、撰者不詳「永平和讃」弘化四年（二八四七）刊。

道元禪師の伝記史料（主に使用した文献） 成立年代順

初期 元亨三年（一三三二）～天正十七年（一五八九）

（一）洞谷記〔五老悟則并行業略記〕（大乘本）元亨三年（一三三二）～一三三四、瑩山撰。（二）①永平寺三祖行業記（統群本） 応永年間（一三九四～一四二八）写、②元祖孤雲徹通三代尊行状記（大乘本） 応永年間（一三九四～一四二八）写。（三）仏祖正伝記（永福本） 応永六年（一三九九）、天性撰。（四）伝光録Ⅰ（乾坤本） 永享～長祿年間（一四三〇～一四五九）写、芝岡宗伝等写。（五）碧山日録 長祿四年（一四六〇）、大極撰。（六）明州本建撕記（永平建撕記） 天文七年（一五三八）写。（七）瑞長本建撕記（元古仏縁記） 天正十七年（一五八九）写。

中期 永曆四年(一六四八) 〓元禄七年(一六九四)

(8) 繼灯録 永曆四年(一六四八)・順治八年(一七五

一) 刊、永覚撰。(9) 日域曹洞列祖行業記 寛文十二

年(一六七三) 撰・寛文十三年刊、懶禅撰。(10) 初祖

道元禪師和尚行録Ⅰ(内閣文庫本、写本)、(11) 永平開

山道元和尚行録Ⅱ(駒大図書館蔵) 延宝元年(一六七

三) 刊。(12) 扶桑禅林僧宝伝 延宝三年(一六七五)

撰・貞享五年(一六八八) 刊、高泉撰。(13) 延宝伝灯

録 延宝六年(一六七八) 撰・宝永四年(一七〇七)

刊、卍元撰。(14) 永平仏法道元禪師紀年録 延宝六年

(一六七八) 撰・元禄二年(一六八九) 刊、大了撰。

(15) 日東洞宗初祖元和尚道行碑銘 延宝七年(一六七

九) 高泉撰。(16) 延宝本建撕記(道元禪師行業記) 延

宝八年(一六八〇) 写。(17) 永平元禪師伝(月坡全録)

天和二年(一六八二) 刊、月坡撰。(18) 永平元禪師行

状記(永平語録標指鈔) 貞享元年(一六八四) 撰・同

二年(一六八五) 刊、安州撰。(19) 僧譜冠字韻類 貞

享二年(一六八五) 撰・元禄元年(一六八八) 刊、版橋

撰。(20) 永平伝法記 元禄四年(一六九二)、大円撰。

(21) 高祖略伝Ⅰ(正法眼蔵重写記) 元禄五年(一六九

二)、節冕撰。(22) 日域洞上諸祖伝 元禄六年(一六九

三) 撰・元禄六年刊、湛元撰。(23) 正法眼蔵九十四陞

座 元禄六年(一六九三) 写。(24) 門子本建撕記(開

山禪師之行状) 元禄七年(一六九四) 写。

後期 元禄十五年(一七〇二) 〓安政六年(一八五九)。

(25) 本朝高僧伝 元禄十五年(一七〇二) 撰・宝永四

年(一七〇七) 刊、卍元撰。(26) 道元禪師行状之記

元禄十五年(一七〇二)、閩山写。(27) 永平開山禪師之

行状伝聞記Ⅰ(岸澤本) 宝永六年(一七〇九)・宝曆九

年(一七五九) 写、撰者不詳。(28) 永平開山和尚実録

宝永七年(一七一〇) 撰・正徳元年(一七一一) 刊、面

山撰。(29) 御開山行録Ⅲ(永平寺蔵) (一七一六) 一

七二九)。(30) 大扶桑国越州吉祥山永平禪寺三祖行業記

享保年間(一七一六) 一七三六)、貴外写。大日本国越

州吉祥山永平禪寺三祖行業記 享保年間(一七一六) 一

七三六)、道忠写。(31) 永平祖師年譜偈 享保二年(一

七二七) 撰・延享元年(一七四四) 刊、面山撰。(32)

日本洞上聯灯録 享保十二年(一七二七) 輯・寛保二年

(二七一七) 刊、面山撰。(33) 日本洞宗始祖道元禪師伝
享保十五年(一七三〇)撰・享保十六年刊、古溪撰。
(34) 永平初祖行状記(建擿記系円応寺本) 享保十五年
(二七三一)、喚三叟齋写。(35) 永平祖師賛 享保十七
年(二七三二)刊、面山撰。(36) 元文本(祖山本建擿
記) 元文三年(一七三八)、(37) 高祖禪師和讃 寛保
二年(一七四二)撰・明和六年(一七六九)刊、万仞
撰。(38) 訂補本(永平開山御行状建擿記) 宝暦四年
(二七五四)序刊。(39) 永平高祖略伝Ⅱ(永平破五位
弁) 宝暦十三年(一七六三)、万仞撰。(40) 瑩山和尚
伝光録Ⅱ 明和四年(一七六七)写、海巖寂靜写。
(41) 行録Ⅱ 明和八年(一七七二)、恒山一川写。
(42) 永平祖師行状記(建擿記系西明寺本) 安永七年
(二七七八)写、筆者不詳。(43) 永平高祖行実紀年略
天明八年(一七八八)刊、玄透撰。(44) 高祖略伝Ⅲ
(正法眼蔵那一宝) 寛政三年(一七九一)、父幼老卵
撰。(45) 建擿記拔萃(道元禪師行状録) 享和二年(一
八〇二)刊、法転撰。(46) 建擿記並御詠歌 享和二年
(一八〇二)、筆者不詳。(47) 勅賜仏法禪師伝聞記Ⅱ

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて(吉田)

(泉岳本) 享和二年(一八〇二)、胡乱齋写。(48) 永平
開山元禪師行状伝聞記Ⅲ(曹全本) 文化二年(一八〇
五)、筆者不詳。(49) 訂補建擿記図会 文化三年(一八
〇六)撰・(文化十四年(一八一七)刊)、面山撰。
(50) 本朝伝来宗門略列祖伝 文化五年(一八〇八)
撰、大冥撰。(51) 永平道元禪師行状図会 文化五年
(一八〇八)・文化六年刊、瑞岡撰。(52) 永平道元禪師
行状之図 文化十三年(一八一六)刊、黄泉撰。(53)
永平開山和尚行状録 文政元年(一八一八)、知仙写。
(54) 永平開山道元禪師略行状記 文政三年(一八二
〇)刊、知見撰。(55) 永平実録隨聞記 文政六年(一
八二三)、撰者不詳、東奥大願写。(56) 永平高祖一代記
画説 天保四年(一八三三)記、筆者不詳。(57) 永平
和讃 弘化四年(一八四七)刊、撰者不詳。(58) 永平
高祖行跡図略伝 嘉永五年(一八五二)頃、撰者不詳。
(59) 瑩山伝光録Ⅲ 安政六年(一八五九)、仙英本。
(60) 永平永平開山道元禪師行状伝聞記Ⅳ(盛林寺蔵)
幕末、筆者不詳。

以下略(明治以降分)

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

道元禪師の伝記史料、その成立と展開 各項目の一覧表

〈☆前掲三の「事項例」の説示と関係論文を参照されたい〉

項目名	初期史料名	中期史料名	後期史料名
<p>○正治二年 誕生「正月二日」 〔胎処十有三月〕 家系「姓源氏、村上天皇九代苗裔、後中書王八世（七世）遺胤」 父 通忠① 通親② 通具③ 具房④ 母 能円之女① 基房之女②（伊子）</p>	<p>明州本、瑞長本 洞谷記、行業記・行状記、伝光録、正伝記、日録、明州本、瑞長本 延宝本</p>	<p>延宝本、門子本、列祖・僧譜 列祖、僧譜、諸祖、高祖略伝Ⅰ 列祖、紀年録「或名家譜」、延宝本「通忠子」、僧譜、門子本 列祖、行録、僧宝、延宝伝灯、紀年録「忠通」（ママ旧版）、禪師行状記 禪師行状記、僧譜、高祖略伝Ⅰ、紀年録（新版）、諸祖「久我氏家譜」 紀年録「或名家譜」、禪師行状録「或家譜伝」 紀年録「或名家譜」、禪師行状記「或家譜伝」 僧譜、高祖略伝Ⅰ、諸祖</p>	<p>元文本。始祖、訂補・訂補図会「正月二日」等 実録、始祖、実録伝聞記 等 実録、訂補、訂補図会「或家譜伝」 高僧、和尚行状録 実録「久我氏家譜」、年譜偈、始祖、訂補・図会 訂補図会「俗譜・或家譜伝」 高祖略伝Ⅱ・訂補図会「俗譜」 実録、始祖、訂補図会、行状図会</p>

<p>相師(古老の言)「七処平滿、眼有重瞳・奇瑞(空中有声)」「天告神異」(白光(祥光)照室)十月二十日、通親薨去『公卿補任』等悲母の潔斎</p>	<p>洞谷記、行業記・行狀記、伝光録、正伝記、日録、明州本、瑞長本</p>	<p>列祖、行録、僧宝、紀年録、延宝本、禪師行狀記、僧譜、高祖略伝 I、門子本 僧譜、諸祖、延宝本</p>	<p>実録、聯灯、元文本、訂補 等</p>
<p>○建仁三年、四歳 神童(古老の贊)「李嶠百詠」を讀む</p>	<p>洞谷記、行業記・行狀記、伝光録、日録、明州本、瑞長本</p>	<p>列祖、紀年録、延宝本、僧譜、伝法記、門子本</p>	<p>実録、元文本、訂補</p>
<p>○建永元年、七歳 「左伝毛氏」を讀む</p>	<p>洞谷記、行業記・行狀記、伝光録、日録、明州本、瑞長本</p>	<p>列祖、紀年録、延宝本、伝法記、門子本</p>	<p>実録、元文本、訂補 等</p>
<p>○建永元年、八歳 悲母逝去「悲母遺囑」</p>	<p>洞谷記、行業記・行狀記、伝光録、日録、明州本、瑞長本</p>	<p>列祖、紀年録、延宝本、僧譜、伝法記、門子本</p>	<p>実録、聯灯、元文本、訂補 等</p>
<p>○承元二年、九歳 「俱舍論」を讀む 古老名儒の贊</p>	<p>洞谷記、行業記・行狀記、伝光録、日録、明州本、瑞長本</p>	<p>列祖、紀年録、延宝本、伝法記、門子本</p>	<p>実録、聯灯、元文本、訂補 等</p>
<p>松殿の猶子要請</p>	<p>洞谷記、行業記・行狀記、伝光録、日録、明州本、瑞長本</p>	<p>延宝本、門子本</p>	<p>元文本、訂補 等</p>
<p>良頭を訪ねる①(外舅)</p>	<p>行業記・行狀記、伝光録、日録、明州本、瑞長本</p>	<p>繼灯録、列祖、紀年録、延宝、伝灯、延宝本、禪師行狀記、伝法記、門子本</p>	<p>高僧伝、実録、聯灯、始祖、高祖略伝 II 等</p>

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて(吉田)

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

項目名	初期史料名	中期史料名	後期史料名
<p>良観を訪ねる②</p> <p>○建曆二年、十三歳</p> <p>木幡山莊から比叡山良頭（良観）の室 横川首楞嚴院へ</p> <p>○建保元年、十四歳</p> <p>四月九日、座主公円に就き剃髮出家</p> <p>十日、菩薩戒を受く</p> <p>天台・真言の教法を学習</p> <p>比叡山参学</p> <p>公円の人柄</p> <p>公円、栄西指示</p> <p>公胤に参訪</p> <p>公胤、入宋誨励</p> <p>公胤、明全指示</p> <p>公胤、栄西指示</p> <p>建仁寺に参ず（入宋迄四ヶ年）</p>	<p>洞谷記、行業記・行状記、伝光録、日録、明州本、瑞長本</p> <p>洞谷記、行業記・行状記、伝光録、正伝記、日録、明州本、瑞長本</p> <p>洞谷記、行業記・行状記、伝光録、正伝記、日録、明州本、瑞長本</p> <p>洞谷記、行業記・行状記、伝光録、正伝記、日録、明州本、瑞長本</p> <p>洞谷記、行業記・行状記、正伝記、明州本、瑞長本</p> <p>洞谷記、正伝記</p> <p>洞谷記、明州本、瑞長本</p>	<p>僧譜、諸祖伝</p> <p>列祖、紀年録、延宝本、僧譜、門子本</p> <p>列祖、延宝本、僧譜、伝法記、門子本</p> <p>延宝本、門子本</p> <p>延宝本、門子本</p> <p>延宝本、門子本</p> <p>延宝本、門子本</p>	<p>訂補、拔萃、訂補図会、略行状記、行状図会</p> <p>元文本、訂補 等</p> <p>実録、聯灯、元文本、訂補 等</p> <p>元文本、訂補 等</p> <p>元文本、訂補 等</p> <p>元文本、訂補 等</p> <p>元文本、訂補 等</p> <p>実録、聯灯</p> <p>訂補</p> <p>元文本、聯灯、訂補 等</p>

<p>栄西の室に入る</p>	<p>行業記・行状記、伝光録、日録、明州本、瑞長本</p>	<p>列祖、延宝本、僧譜、伝法記、門子本</p>	<p>訂補 等</p>
<p>○建保二年、十五歳 疑滞①「本来本法性」</p>	<p>訂補</p>	<p>訂補</p>	<p>訂補</p>
<p>○建保三年、十六歳 七月五日、栄西示寂（八月一日説）</p>	<p>明州本、瑞長本</p>	<p>紀年録、延宝本、門子本</p>	<p>元文本、訂補</p>
<p>建仁寺と比叡山の間を往来 明全に参随</p>	<p>明州本、瑞長本</p>	<p>延宝本、門子本 延宝本、僧譜、門子本 等</p>	<p>実録、元文本、訂補 元文本、聯灯、訂補 等 実録</p>
<p>○建保五年、十八歳</p>	<p>明州本、瑞長本</p>	<p>紀年録、延宝本、門子本</p>	<p>元文本、訂補 等</p>
<p>八月二十五日より建仁寺掛 錫、明全の室に入る 入唐（宋）の望み</p>	<p>洞谷記、行業記・行状記、伝光録、正伝記、日録、明州本、瑞長本 行業記・行状記、（伝光録）、正伝記、明州本、瑞長本</p>	<p>紀年録、延宝本、門子本</p>	<p>元文本 等</p>
<p>大疑滞（疑团）②</p>	<p>行業記・行状記、（伝光録）、正伝記、明州本、瑞長本</p>	<p>延宝本、僧譜、伝法記、門子本</p>	<p>元文本</p>
<p>○承久三年、二二歳 明全より臨濟黄龍派十世の法を受く（伝法？）</p>	<p>洞谷記、行業記・行状記、伝光録、正伝記、日録、明州本、瑞長本</p>	<p>紀年録、延宝本、高祖略伝Ⅰ、門子本</p>	<p>元文本、訂補</p>
<p>○貞応元年、二三歳</p>	<p>訂補</p>	<p>訂補</p>	<p>訂補</p>

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

項目名	初期史料名	中期史料名	後期史料名
<p>これまで大蔵經二遍周覽②、明全より菩薩戒伝授木下道正の事</p> <p>○貞応二年、二四歳</p> <p>二月二四日、明全等と入宋。</p> <p>『渡海牒』</p> <p>一葉観音出現①</p> <p>四月、明州港着岸（寧波）</p> <p>五月、育王典座相見</p> <p>七月、天童山掛錫</p> <p>無際と相見</p> <p>無際の嗣書拝閲①『眼蔵』嗣書</p> <p>〔新到列位〕</p> <p>〔七仏聖訓〕</p> <p>表書一</p> <p>表書二</p>	<p>（洞谷記）、行業記・行状記、（伝光録）、正伝記、明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>行業記・行状記、明州本、瑞長本</p> <p>洞谷記、行業記・行状記、伝光録、正伝記、日録、明州本、瑞長本</p> <p>洞谷記、行業記・行状記、伝光録《以下同右》</p> <p>行業記・行状記、正伝記</p> <p>（洞谷記）、行業記・行状記、日録、明州本、瑞長本</p> <p>行業記・行状記、明州本、瑞長本</p> <p>行業記・行状記、明州本、瑞長本</p>	<p>僧譜</p> <p>列祖、延宝本、僧譜、伝法記、門子本、等</p> <p>門子本</p> <p>紀年録、延宝本、門子本</p> <p>繼灯、列祖、行録、僧宝、延宝伝灯、紀年録、僧譜、延宝本、伝法記、諸祖、門子本</p> <p>繼灯、列祖、行録、僧宝、延宝伝灯、紀年録《以下同右》</p> <p>列祖、延宝本、門子本</p> <p>列祖、延宝本、門子本</p> <p>列祖、延宝本、門子本</p>	<p>実録、訂補 等</p> <p>訂補</p> <p>実録、聯灯、訂補、訂補図会 等</p> <p>元文本</p> <p>実録、元文本、訂補 等</p> <p>実録、訂補・図会</p> <p>実録、聯灯、始祖、元文本、訂補、高祖略伝一、拔萃 等</p> <p>実録、聯灯、始祖、元文本、訂補《以下同右》</p> <p>実録、初祖行状記、祖師行状記等</p> <p>実録、聯灯、元文本、訂補</p> <p>実録</p> <p>実録、元文本、訂補</p> <p>元文本、訂補</p>

<p>表書三 戒臘遵守の勅裁(寧宗の勅宣) 育王典座と再商量 仏眼下嗣書拝見 法眼下嗣書拝見 雲門下嗣書拝見 楊岐下嗣書拝見 ○嘉定十七年、二五歳 無際の嗣書拝覽② 僧堂合掌披衣感激『眼蔵』伝衣</p> <p>諸方の名宿参訪 浙翁如琰、 盤山思卓、惟一西堂、宗月長 老。伝蔵主、元暉等 育王山成桂を勘驗 天台山にて弾虎① 径山にて弾虎② 宋朝禪者に失望・無際の示寂 (四月以前)・帰朝志給 老璣の勧め〔諸説あり。一月 説、五、六月説、七月説〕</p>	<p>行業記・行状記、明州本、瑞長本 行業記・行状記、明州本、瑞長本 伝光録 伝光録 伝光録 伝光録、明州本 伝光録、明州本 日録 明州本、瑞長本 明州本、瑞長本 (洞谷記)、行業記・行状記、正伝 記、日録、明州本、瑞長本</p>	<p>列祖、延宝本、門子本 列祖、延宝本、門子本 列祖、延宝本、門子本 門子本 延宝本、門子本 列祖、延宝本、僧譜、伝法記、門子 本等</p>	<p>元文本、訂補 元文本、訂補 訂補『典座教訓』 訂補、訂補図会 等 実録、訂補図会 等 訂補、訂補図会 等 訂補 実録、初祖行状記、元文本、訂補 訂補、拔萃、行状図会 等 実録、聯灯、元文本、訂補 等 訂補『眼蔵』仏性 元文本、初祖行状記、祖師行状記 元文本、拔萃、行状図会 実録、聯灯、元文本、訂補、拔萃、 行状図会 等</p>
---	---	---	---

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて(吉田)

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

項目名	初期史料名	中期史料名	後期史料名
<p>如浄の道誉</p> <p>如浄、大梅の夢告</p> <p>如浄、洞山の夢告①</p> <p>如浄入寺（月日なし）</p> <p>五月十日、如浄入寺①</p> <p>七、八月頃、如浄入寺②（鏡島・伊藤説）</p> <p>○宝慶元年、二六歳</p> <p>元肅の嗣書拝覽</p> <p>如浄、洞山の夢告②</p> <p>五月、如浄に初相見</p> <p>五月一日、相見得法①</p> <p>明全、了然寮に示寂『千光祠堂記』</p> <p>入室参問の申請、許可『宝慶記』</p>	<p>明州本、瑞長本</p> <p>伝光録</p> <p>洞谷記、行業記・行状記、伝光録、正伝記、日録、明州本、瑞長本</p> <p>陸座</p> <p>伝光録</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>陸座</p>	<p>繼灯録、行録、延宝本、諸祖、門子本</p> <p>延宝本</p> <p>列祖、行録、僧宝、延宝伝灯、延宝本、門子本</p> <p>（紀年録）、行状之記</p> <p>延宝本</p> <p>延宝本</p> <p>延宝本</p> <p>延宝本</p>	<p>元文本</p> <p>元文本、訂補 等</p> <p>実録、訂補図会、行状図会、画説元文本、訂補、訂補図会、和尚行状録、聯灯 等</p> <p>実録、元文本</p> <p>訂補、訂補図会、祖師行状記、年譜傷</p> <p>訂補、訂補図会、略行状記、拔萃</p> <p>実録、訂補</p>

<p>七月二日、参問「教外別伝」 『宝慶記』 得法「身心脱落」話 九月十八日、伝戒相承「仏祖 正伝菩薩戒作法」尾 同日、伝戒・嗣法② 広平侍者贊嘆 江西にて彈虎③ 韋將軍①、帰国勸請（韋駄天、 韋駄天神） ○宝慶三年、二八歳 如浄の慈誨「化度班衣可着」 等 「碧岩集」書写①「一夜碧岩」 （日本達磨宗の伝来か） 太陽・投子嗣承問題（法嗣七 人）</p>	<p>（洞谷記）、行業記・行状記、伝光 録、正伝記、日録、明州本、瑞長本 行業記・行状記、伝光録、日録、 明州本、瑞長本 行業記・行状記、明州本 明州本、瑞長本 明州本、瑞長本 明州本、瑞長本 本（大権修利菩薩） 明州本、瑞長本</p>	<p>列祖、紀年録、延宝本、僧譜、伝法 記、門子本 等 延宝本、門子本 延宝本、門子本 延宝本、門子本 列祖、行録、紀年録、延宝本、僧 譜、諸祖 列祖、行録、僧宝、延宝本、僧譜、 諸祖 列祖、紀年録、延宝本、僧譜、諸 祖、門子本 列祖「白山明神」、行録・延宝本 「白山明神」、僧譜「白衣神人」、 諸祖「白山明神」、門子本「大権 修理菩薩」等 紀年録、門子本</p>	<p>実録、訂補、抜萃 実録、聯灯、始祖、元文本、訂補、 高祖略伝 等 始祖、元文本、訂補 等 実録、祖師年譜、行実紀年略、 訂補、行実図会、永平和讃 元文本、訂補 等 実録、訂補 II 高僧、実録、聯灯、始祖、高祖略伝 実録、聯灯、元文本、行状之記、和 尚行状録 等 元文本「大権修理」、聯灯「白山 明神」等 実録、元文本、訂補</p>
--	--	--	---

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

項目名	初期史料名	中期史料名	後期史料名
<p>「未采記」を書置く 道正家伝解毒丸の事（稻荷神化現）「木下道正？」 入室面授嗣法③ 如浄「五箇条の垂誠」『宝慶記』 「碧石集」書写② 天童陞座「五十問答」 ◎如浄の示寂、宝慶三年七月十七日 龍天（大権修理）と補陀大士（観音）の化現② 一葉観音化現③ 帰朝（日本安貞元年） 肥後河尻（川尻）着岸Ⅰ 福岡太宰府着岸Ⅱ 如来寺・大慈寺の事</p>	<p>明州本、瑞長本 明州本、瑞長本 陞座 明州本、瑞長本 洞谷記、行業記・行状記、伝光録、仏祖正伝記、（日録）、明州本・瑞長本（秋） 明州本、瑞長本</p>	<p>門子本 僧譜 繼灯、禪師行状記 延宝本、門子本 紀年録 門子本 列祖「大権修理」、行録、紀年録、延宝本、碑銘 僧譜、延宝伝灯 列祖、行録、僧宝、紀年録、僧譜、延宝伝灯、延宝本（冬）、門子本（秋） 延宝本、僧譜、諸祖、門子本 行録、延宝伝灯 延宝本、門子本</p>	<p>元文本、訂補 訂補、訂補図会、拔萃、行状図会、略行状記 等 高僧、聯灯、始祖、高祖略伝Ⅱ 元文本、訂補 訂補「白山権現」、和尚行状録「白山明神」 禪師行状之記、和尚行状録 元文本、祖師行状記「七日」、建 撕詠歌 実録 聯灯、訂補「南溟山観音寺」☆ 高僧、実録、聯灯、元文本、訂補（冬） 実録、聯灯、元文本、訂補、拔萃、行状之図 高僧 元文本、訂補☆</p>

<p>「将来・伝授物」① 釈迦文仏之茵褥、道信香合、惠能念珠、洞山頂相、懽多羅僧、安陀会鉢、多羅、竹篋、弘子</p> <p>「将来物」② 楷祖法衣・宝鏡三昧・五位頭訣・自贊頂相授与</p> <p>○安貞二年、二九歳</p> <p>建仁寺へ寓居 懷奘の参問①</p> <p>○寛喜二年、三一歳</p> <p>深草に閑居（極楽寺別院安養院）</p> <p>○天福元年、三四歳</p> <p>弘誓院・正覚禪尼の外護</p> <p>興聖寺創建</p> <p>懷奘・僧海・詮慧等 参学②</p> <p>心地覚心、受菩薩戒①</p> <p>○文暦元年、二五歳</p> <p>懷奘等弟子となる③</p>	<p>（行業記・行状記）、（正伝記）、日録（明州本）</p> <p>日録、（明州本、瑞長本）</p> <p>正伝記、明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>洞谷記、行業記・行状記、伝光録、正伝記、日録、明州本、瑞長本</p> <p>洞谷記、正伝記、行業・行状、明州本、瑞長本</p>	<p>列祖②、行録（祖山本・明和本）、延宝本②、僧譜②</p> <p>列祖①、（行録、紀年録、僧譜①、（僧宝）、（延宝伝灯）、延宝本①</p> <p>列祖、紀年録、僧譜、伝法記、（門子本）</p> <p>門子本</p> <p>列祖、行録、僧宝、紀年録、延宝本、僧譜、諸祖、門子本</p> <p>列祖、延宝本、僧譜、伝法記、門子本</p> <p>延宝本、伝法記</p> <p>延宝伝</p> <p>紀年録、僧譜、延宝本、門子本</p>	<p>和尚行状録</p> <p>実録、聯灯、訂補、拔萃、行状図会、行状之図、高祖行状記</p> <p>聯灯、訂補（元文本）</p> <p>聯灯、元文本、訂補、行実紀年略</p> <p>高僧、行状之記、実録、訂補</p> <p>実録、聯灯、元文本、訂補</p> <p>訂補</p> <p>初祖行状記、訂補、祖師行状記、元文本</p>
--	---	--	---

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

項目名	初期史料名	中期史料名	後期史料名
<p>同右（嘉禎二年） ○文暦二年、三六歳 八月、懷奘、伝法 九月（改暦嘉禎元年）懷奘に 大事を授く 理観に戒脈授与 「僧堂勸進疏」撰述 ○嘉禎二年、三七歳 仏殿法堂山門建立 十月十五日、興聖寺の開堂 「懷奘略伝」 天童和尚忌上堂① 『随聞記』示衆① 【二葉観音出現（入宋前）①前 出】 『随聞記』示衆② 「僧堂勸進疏」撰述 曇希の奥 書 懷奘、首座の秉扨</p>	<p>明州本、瑞長本 明州本、瑞長本 明州本、瑞長本 明州本、瑞長本 正伝記、日録、明州本、瑞長本</p>	<p>行録、諸祖 延宝本、門子本 延宝本、門子本 門子本 紀年録、僧譜 繼灯、列祖、紀年録、延宝本、僧 譜、諸祖、門子本 僧譜 （門子本） 紀年録 門子本</p>	<p>元文本 初祖行状記、祖師行状記等 訂補、訂補図会 元文本、訂補 等 実録、実録随聞記 高僧、実録、聯灯、始祖、元文本、 訂補、高祖略伝Ⅱ、行状図会 行状図会 実録 ☆〔誤〕 訂補 （元文本） 訂補 訂補 訂補、元文本 訂補</p>

<p>○嘉禎三年、三八歳 「出家授戒作法」撰述</p> <p>○仁治二年、四二歳 春「如浄語録」到来① 覚心に菩薩戒授与②</p> <p>○仁治三年、四三歳 近衛殿と法談 九月一日、「二葉観音贊偈」(有相異)</p> <p>五月一日、義尹に大事授与 覚心に菩薩戒授与③</p> <p>八月五日、「如浄語録」到来②</p> <p>同六日、上堂</p> <p>十二月十七日、波多野邸「全機」示衆「波多野家略譜」</p> <p>○寛元元年、四四歳 波多野義重越州に下る(下検分?) 寂靜なる地を求む</p>	<p>明州本、瑞長本 明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本 明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本 明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>洞谷記、行業記・行状記、日録、明州本、瑞長本 行業記・行状記、明州本、瑞長本</p>	<p>紀年録、門子本 紀年録</p> <p>紀年録、延宝本、僧譜、門子本 紀年録、門子本</p> <p>紀年録、延宝本、門子本 紀年録、延宝本、門子本</p> <p>延宝本、延宝本、門子本 紀年録、延宝本、門子本</p> <p>延宝本、門子本 延宝本、門子本</p>	<p>訂補、訂補図会 実録☆ 実録</p> <p>元文本、訂補 元文本、訂補</p> <p>訂補 元文本、訂補</p> <p>元文本、訂補☆ 祖師行状記 等</p> <p>元文本、訂補、祖師行状記 等 元文本、訂補『眼藏』全機、行状図会</p> <p>元文本、訂補 等 元文本、訂補 等 元文本、訂補 等</p>
--	--	---	--

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて(吉田)

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

項目名	初期史料名	中期史料名	後期史料名
<p>義重、古寺寺領を寄進し入越勸請 下向決意 北越入山 吉峰寺・禪師峰在任期間の事 義重・覚念、寺処を傘松に得る 吉峰の茅舎を移す ○寛元二年、四五歳 吉峰峰・禪師峰往来教化す 二月二五日、天神に参詣和韻（『広録』） 禪師峰・吉峰往来行化の証 永平寺（大仏寺）法堂造営 七月十八日、大仏寺開堂・偈頌。開堂法要瑞相「龍天・山神」 「吉祥」山名典拠① 参会随喜の人衆 興法勝地の由縁</p>	<p>行業記・行状記、明州本、瑞長本 瑞長本 洞谷記、行業記・行状記、正伝記、日録、明州本、瑞長本 明州本、瑞長本 明州本、瑞長本 明州本、瑞長本</p>	<p>紀年録、延宝本、門子本 門子本 列祖、延宝本、僧譜、門子本 紀年録 延宝本、門子本 延宝本、門子本 延宝本、門子本 延宝本 延宝本、門子本 延宝本、門子本 延宝本、門子本</p>	<p>実録、聯灯 実録、訂補 実録、元文本、訂補 等 訂補 元文本、訂補 等 元文本、訂補 訂補 初祖行状記、元文本、訂補 元文本、訂補 聯灯、元文本、訂補 実録、始祖、元文本、訂補、訂補図会、行跡図略伝、行実図会 聯灯 元文本、訂補 元文本、訂補</p>

<p>「吉祥」山名典拠② 大仏寺を永平寺と改称① 学道の用心を示す</p> <p>「和論語」の提示 法堂の開堂法要・清規を行ず 義準、木犀樹を送付</p> <p>十一月三日、大仏寺僧堂上棟式</p> <p>開山自作の本尊 堂閣わずか両三</p> <p>○寛元三年、四六歳 三月六日眼蔵六五巻を示す 懐英、眼蔵取録</p> <p>四月、大仏寺初結夏瑞相「天華乱墜」</p> <p>○寛元四年、四七歳 大仏寺を永平寺と改称②</p> <p>「知事清規」施行</p>	<p>明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p>	<p>延宝本</p> <p>列祖、延宝本、僧譜</p> <p>延宝本、門子本</p> <p>延宝本、門子本</p> <p>延宝本、門子本</p> <p>延宝本、門子本</p> <p>延宝本、門子本</p> <p>延宝本、門子本</p> <p>延宝本、門子本</p> <p>延宝本、門子本</p> <p>門子本</p> <p>延宝本、門子本</p>	<p>元文本、訂補</p> <p>元文本、訂補</p> <p>初祖行状記、祖師行状記、元文本、訂補</p> <p>拔萃、訂補図会</p> <p>元文本、訂補</p> <p>元文本、訂補、初祖行状記、祖師行状記 等</p> <p>元文本、訂補、訂補図会、拔萃</p> <p>元文本、(訂補)</p> <p>元文本、訂補、訂補図会</p> <p>元文本、訂補、訂補図会</p> <p>元文本、訂補、訂補図会</p> <p>実録、元文本、訂補</p> <p>元文本、訂補 等</p>
--	---	---	--

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて (吉田)

<p>時頼の伽藍建立</p> <p>建長寺開山招聘を固辭</p> <p>六条堡寄進不受</p> <p>時頼、「道歌」所望</p> <p>玄明擯罰の事</p> <p>玄明後日譚</p> <p>蘭溪道隆の書状</p> <p>永平（道元）返信</p> <p>（蘭溪示寂）永平返信</p> <p>二通書札心得難し</p> <p>○宝治二年、四九歳</p> <p>三月十三日、永平寺帰山</p> <p>同十四日、上堂『広録』卷三</p>	<p>行業記、行状記、明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>行業記、行状記</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p>	<p>列祖、行録、僧宝、延宝伝灯、延宝本、僧譜、門子本 等</p> <p>列祖、紀年録、延宝本、僧譜、諸祖、門子本</p> <p>紀年録、延宝本、門子本</p> <p>（紀年録）、延宝本、門子本</p> <p>紀年録、延宝本、門子本</p> <p>紀年録、延宝本、門子本</p> <p>紀年録、延宝本、門子本</p> <p>紀年録、延宝本、門子本</p> <p>紀年録、延宝本、門子本</p> <p>紀年録、延宝本、門子本</p>	<p>禪師行状之記、実録、初祖行状記、訂補、元文本、祖師行状記、拔萃、訂補、図会等</p> <p>実録、聯灯、始祖、元文本、訂補、高祖略伝Ⅰ 等</p> <p>初祖行状記、元文本、訂補、祖師行状記 等</p> <p>元文本、初師行状記、祖師行状記、訂補、（図会）等</p> <p>元文本、初師行状記、祖師行状記、訂補 等</p> <p>元文本、初師行状記、訂補 等</p> <p>実録、元文本、訂補、初祖行状記、祖師行状記 等</p> <p>元文本、訂補</p> <p>訂補</p> <p>元文本、訂補 等</p> <p>元文本、訂補 等</p>
---	---	---	---

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

項目名	初期史料名	中期史料名	後期史料名
<p>四月、十一月、僧堂芳香 瑞相「異香殊勝」（「三箇靈瑞」の一）</p> <p>「血脈度靈」A（義重の愛妾） 《亡靈授戒》</p> <p>「血脈度靈」B（藤原永平の愛妾）《畜生授戒》</p> <p>○宝治三年、五十歳</p> <p>（改曆三月建長元）元旦、羅漢供養法会 瑞相「生羅漢」</p> <p>「供養作法」奥書</p> <p>一月十一日、「衆寮箴規」撰述</p> <p>「尽未来際不離誓約」（『広録』不見）</p> <p>○建長二年、五一歳</p> <p>義重、一切経寄進</p> <p>「上堂」『広録』卷五</p> <p>「血脈度靈」B</p> <p>「吉祥山山居頌」三首</p>	<p>明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p> <p>明州本、瑞長本</p>	<p>紀年録、延宝本、門子本</p> <p>行録（祖山本・明和本、延宝本「附録四条」、諸祖</p> <p>列祖、紀年録、延宝本、</p> <p>列祖、行録、僧宝、延宝伝灯、紀年録、延宝本、僧譜 等</p> <p>紀年録、延宝本、門子本</p> <p>延宝本、門子本</p> <p>延宝本、門子本</p> <p>延宝本</p> <p>僧譜</p> <p>紀年録、延宝本、門子本</p>	<p>元文本、訂補、訂補図会、行状図会</p> <p>訂補図会、行状図会、高祖行状記、行状之図 等</p> <p>実録、諸祖、年譜偈、禪師和讃、伝聞記、和尚行状録</p> <p>高僧、禪師行状録、実録、聯灯、元文本、訂補 等</p> <p>初祖行状記、元文本、祖師行状記、訂補</p> <p>初祖行状記、元文本、祖師行状記、訂補</p> <p>実録、訂補</p> <p>元文本、訂補</p> <p>元文本、訂補</p>

<p>○建長三年、五二歳 「不思議鐘声」(七、八年、二百声) 正月五日、花山院宰相と談議</p>	<p>明州本、瑞長本 行業記・行状記、明州本、瑞長本</p>	<p>紀年録、延宝本、門子本 紀年録、延宝本、門子本</p>	<p>元文本、訂補、訂補図会、抜粹等 元文本、訂補、訂補図会、抜粹等</p>
<p>○建長四年、五三歳 夏頃「微疾」① 夏から暮迄に遺誠「八大人覚」(十二卷『眼蔵』) 懷奘の識語(『眼蔵百卷志望』) この巻護持すべし</p>	<p>行業記・行状記、明州本、瑞長本 明州本、瑞長本 明州本、瑞長本 明州本、瑞長本</p>	<p>延宝本、門子本 行録、紀年録、延宝本、門子本 延宝本、門子本 延宝本、門子本</p>	<p>元文本、訂補、高祖略伝Ⅱ、略行状記、禪師和讃等 実録、元文本、訂補、抜粹、訂補図会、行状図会、行状之図等 元文本、訂補 元文本、訂補</p>
<p>○建長五年、五四歳 夏頃「微疾」② 七月十四日、懷奘の上堂「伝相伝衣」 上洛療養要請</p>	<p>明州本、瑞長本 行業記・行状記、明州本、瑞長本 明州本、瑞長本 明州本、瑞長本</p>	<p>延宝本、諸祖、門子本 列祖、紀年録、僧譜、禪師行状之記、延宝本、門子本 列祖、行録、僧宝、延宝伝灯、延宝本、僧譜 延宝本、門子本</p>	<p>元文本、訂補、高祖略伝Ⅱ等 元文本、始祖、初祖行状記、訂補、祖師行状記、抜粹 聯灯、元文本、訂補、初祖行状記、祖師行状記等 元文本、訂補等</p>
<p>八月五日、上洛療養に出山、頌歌 俗弟子覚念邸療養</p>	<p>明州本、瑞長本 明州本、瑞長本 明州本、瑞長本</p>	<p>紀年録、延宝本、門子本</p>	<p>元文本、訂補、抜粹、初祖行状記、祖師行状記等</p>

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて(吉田)

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

項目名	初期史料名	中期史料名	後期史料名
<p>後深草院、官医を召請</p> <p>室内経、行法華経（妙法蓮華経庵）</p> <p>誦経の心意</p> <p>八月二八日、示寂・遺偈</p> <p>入寂の相「坐化、留三日顔貌如生、室有異香、舍利無数」</p> <p>遺弟・僧俗の悲歎</p> <p>懐英、半時程氣絶</p> <p>茶毘・茶毘処「東山赤筑地」</p> <p>取骨・建塔（永平寺奉安）「承陽」塔</p> <p>涅槃儀式（本葬式）</p>	<p>行業記・行状記、明州本、瑞長本</p> <p>明州本</p> <p>洞谷記、行業記・行状記、正伝記、日録、明州本、瑞長本</p> <p>瑞長本</p>	<p>延宝本</p> <p>紀年録、延宝本、門子本</p> <p>延宝本、門子本</p> <p>延灯、列祖、行録、僧宝、紀年録、延宝、伝灯、延宝本、僧譜、伝法記、諸祖、門子本 等</p> <p>繼灯、列祖、行録、僧宝、延宝本、紀年録、延宝、伝灯、僧譜、伝法記、諸祖</p> <p>延宝本、門子本</p> <p>紀年録、延宝本、門子本</p> <p>延宝本、門子本</p> <p>列祖、行録、僧宝、紀年録、延宝、伝灯、延宝本、僧譜、門子本</p> <p>延宝本、門子本</p>	<p>実録、始祖、高祖略伝Ⅱ、永平和讃、行跡図略伝</p> <p>元文本、訂補、初祖行状記、祖師行状記 等</p> <p>元文本、訂補、初祖行状記、祖師行状記 等</p> <p>高僧、実録、聯灯、初祖行状記、始祖、元文本、訂補、高祖略伝Ⅱ、祖師行状記、拔粹、建詠、訂補図会 等</p> <p>高僧、実録、聯灯、禪師行状記、拔粹、和尚行状録、伝聞記 等</p> <p>元文本、訂補 等</p> <p>初祖行状記、元文本、訂補、拔粹、訂補図会 等</p> <p>元文本、訂補、初祖行状記、祖師行状記、拔粹 等</p> <p>実録、初祖行状記、元文本、訂補、祖師行状記、行状之記 等</p> <p>元文本、訂補 等</p>

<p>覚念の供養と供養所および家系</p> <p>俗寿・僧臘①「五四・三七」②「五四・四一」③「五四・四四」</p> <p>門弟（嗣法の弟子）</p> <p>剃度、菩薩戒の弟子</p>	<p>明州本、瑞長本</p> <p>①正伝記、行業記・行状記、日録 ②洞谷記</p> <p>正伝記、明州本、瑞長本</p> <p>行業記・行状記、日録、明州本、瑞長本</p>	<p>延宝本、門子本</p> <p>①永平元禪師伝、伝法記、②繼灯、列祖、行録、僧宝、碑銘、延宝本、僧譜、等</p> <p>繼灯、延宝本、伝法記、諸祖、門子本</p> <p>行録、延宝本、諸祖、僧譜、門子本</p>	<p>元文本、訂補</p> <p>②高僧、聯灯、始祖、実録、和尚行状録、等 ③伝聞記</p> <p>行状之記、実録、元文本、訂補、禪師行状之記、等</p> <p>禪師行状之記、実録、元文本、訂補、訂補函会、等</p>
--	---	---	--

『道元禪師伝記資料集成』関係論文

- (1) 「心塵脱落と身心脱落について」一九七八年三月、宗学研究二〇号、一八五―一八八。『宝慶記』『正法眼蔵』『永平広録』『如浄語録』を通し道元・如浄の師資問答の誤解か展開か。
- (2) 「高祖伝研究」ノート——初学者の一助として「一九七九年八月、曹洞宗研究紀要一一号、一九七―二二三。伝記資料一三本を用い主な内容三十六項目の対比と
- (3) 「本来本法性」疑団の考察——その虚構性に関して「一九七九年三月、宗学研究二二号、一八五―一九一。『三大尊行状記・三祖行業記』『建撕記』等に所載する「疑団」の分析。
- (4) 「興聖寺時代における懷瑩禪師の行実」一九八〇年三月、宗学研究二二号、四七―五二。菩薩戒授与、眼蔵書写、随聞記筆録、典座職、嗣法、任首座等。
- (5) 「高祖道元禪師伝再考——粉飾的記述に関して」一九

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて（吉田）

- 八五年三月、宗学研究二七号、六六一―七二。道元伝の四話「誕生」「遊歴」「碧巖書写」「帰朝時」の内容分析。
- (6) 「高祖道元禪師伝考——新到列位の問題」一九八六年三月、宗学研究二八号、五五一―六〇。道元伝の入宋時の「戒次」の真偽問題を日中の戒律規制に即し論述。
- (7) 「高祖道元禪師伝考——戒牒に関する問題」一九八七年三月、宗学研究二九号、六九一―七四。前掲(6)の問題を日中の受戒・伝戒および「戒牒」の相違から論究。
- (8) 「宝慶記と高祖道元禪師伝」一九八七年三月、宗教学論集一三輯、二八一―二九二。『宝慶記』が道元伝に引用・反映している項目を比較・分析。
- (9) 「内閣文庫所蔵の道元禪師伝（二種）に関して」一九九〇年三月、印仏研三八巻二号、六三一―七〇。同文庫蔵『永平道元禪師行状』『越州吉祥山永平道元禪師』の書誌学的考察。
- (10) 「高祖道元禪師の伝記研究——粉飾の記事に関して」東洋学論集（佐藤匡玄博士頌寿紀念論集）一九九〇年三月、四三三―四五三、朋友書店。前掲(5)の展開。諸種の神秘的な逸話の分析とその意義を論述。
- (11) 「道元禪師伝の史料研究」「三大尊行状記」と「三祖行業記」を中心に「一九九二年三月、駒大禅研年報三、六三―一〇二。国内研修成果。「行状記」と「行業記」の異本七種比較対照。
- (12) 「無著道忠筆『永平禪師三祖行業記』の翻刻・紹介」一九九二年三月、宗学研究三四号、一〇〇―一〇六。国内研修成果。龍華院蔵の同書を翻刻し書誌学的分析をなす。
- (13) 「瑩山禪師撰とされる『道元禪師伝』考」一九九二年三月、印仏研四一巻一号、二五三―二五九。「三大尊行状記」と「三祖行業記」の二書を瑩山禪師の撰述とする説への批判。
- (14) 「宮城県瑞川寺蔵『永平開山道元和尚行状録』について」一九九三年三月、宗学研究三五号、一〇〇―一〇五。同書の末尾に附録としてある逸話「五十問答」を翻刻し紹介。
- (15) 「愛知県西明寺蔵『永平祖師行状記』を中心に」一九九五年三月、宗学研究三七号、一二三―一二八。同書の書誌学的紹介と他の異本と比較しての内容分析。

- (16) 「道元伝における「開堂演法」に関して」一九九六年三月、宗教学研究六九卷四号、二二五―二二六。前掲(15)の展開、後掲(17)への展開とその経路をまとめたもの。
- (17) 「愛知県松源院所蔵『道元禪師行状記』について」一九九六年三月、宗学研究三八号、一二七―一三二。同書中の「開堂演法(五十問答)」逸話の原点『陞座』との比較分析。
- (18) 「道元禪師外伝「血脈度霊」逸話考——血脈授与による救済と性差別」一九九七年三月、宗学研究三八号、一二七―一三二。授戒会盛行と普及の背景に「性差別」の問題を含む。
- (19) 「伝寂室堅光撰『普勸授戒之縁由』考——「神人化度」と「授戒成仏」について」一九九八年三月、印仏研究四七卷一号、一六七―一七二。「授戒会」の「授戒成仏」は宗旨上の問題。
- (20) 「受戒」信仰について——「受戒入位」「受戒成仏」考」一九九九年三月、宗学研究四一号、七九―八四。諸経論から『修証義』の「受戒入位」⇨受戒成仏を批判的に論究。
- 『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて(吉田)
- (21) 『永平開山元禪師行状伝聞記』における「伝説・說話」の類型」一九九八年三月、宗学研究四〇号、一一五―一二〇。同書の異本四種の書誌的紹介と靈瑞・奇瑞・神人・異人・神仙の逸話を紹介し分析した。
- (22) 「長野県松巖寺所蔵の道元禪師「絵伝」考」二〇〇〇年三月、宗学研究四二号、九五―一〇〇。文政五年、画工臨江斎筆『道元一代曼荼羅』四幅(七〇景)の紹介。
- (23) 「道元禪師「絵伝」台本考——広島県三原市香積寺所蔵本を中心に」二〇〇一年三月、宗学研究四三号、八九―九四。香積寺蔵『道元一代曼荼羅』の絵伝(六九景)に付属する「絵解き台本」を他の同類書と書誌学的に紹介し解説。
- (24) 「道元禪師の伝記と切紙資料について——室内関係資料を中心に」二〇〇三年三月、『禪学研究の諸相(田中良昭博士古稀記念論集)』大東出版社、所収、二九五―三二六。切紙資料による如浄・道元の師資関係、身心脱落、帰朝時瑞相、鎮守逸話、付授相承の解説。
- (25) 「版橈晃全撰『僧譜冠字韻類』所載の『道元伝』考」二〇〇六年三月、印仏研究五四卷二号、二二四―二三一。

『道元禪師伝記史料集成』の刊行を終えて(吉田)

高祖の両親を久我通親・藤原基房女、外舅を良観とした最初の例。

(26) 「永平寺二祖孤雲懷奘禪師の出自考——『僧譜冠字韻類』道元伝付記の懷奘略伝を中心に」二〇〇六年三月、八五―九〇。宗学研究四八号、懷奘出自の新史料を紹介。

(27) 「道元禪師伝の靈瑞逸話考——羅漢信仰の進展と「六羅漢図」の流布」二〇〇七年三月。東海仏教五二輯、一一―一四。宝治三年正月、羅漢供養の際、「生羅漢」の降臨逸話の解説。

(28) 「道元禪師伝の靈瑞逸話考(続)——「高祖彈虎図」の成立と展開」二〇〇七年四月、宗学研究四九号、六一―六六。入宋行脚中、猛虎に遭い杖で追い払った逸話の類型。

(29) 「『聖徳太子伝』と「道元禪師伝」の靈瑞・神異譚考」二〇〇九年三月、廣瀬良弘編『禪と地域社会』吉川弘文館、所収論文、二三―二五一。太子と道元の伝記中に記載されるいくつかの逸話を並べ、共通点と独自の挿話を対比した。

(30) 「道元伝」の靈瑞・神異譚と「最澄伝」および「空海伝」との比較考」二〇〇九年三月、印仏研五七巻二号、五七三―五八三。三祖師の靈瑞・神異譚を比較、靈夢・神祇関係の多出、最澄・空海伝には山岳信仰・修験道・民間信仰等との密接な関係を論究。

(31) 「高祖伝の形成と道正庵——策謀家道正庵十九世徳幽卜順」二〇一一年六月、曹洞宗総合研究センター第十二回学術大会紀要、四〇七―四一二。道正庵卜順の才覚が永平寺との関係をより密接にした事例。

(32) 「再考「新到列位問題」・是認論を否定する」二〇一二年六月、曹洞宗総合研究センター第十三回学術大会紀要、二六七―二七二。前掲(6)の続編。「偽造戒牒」の存在・歴史的認識の欠如を指摘。

(33) 「如浄会下における道元禪師——相見・入室・身心脱落・嗣法・伝戒考」二〇一三年六月、曹洞宗総合研究センター第十四回学術大会紀要、二九一―二九六。先学の研究成果を踏まえ現時点における整理とまとめ。